伊豆礼

第六十八号

井栗公民館　刊

伊久礼

第六十八号

はじめに

井栗公民館長　**五十嵐　章雄**

今年も皆様に御協力をいただき文集「伊久礼」第六十八号をお届けすることができました。御寄稿いただきました方々並びに、関係者皆様に心より厚く御礼申し上げます。

「雲外蒼天」

下手な字ですが書いてみました。今は便利な時代で、ネットで検索すると何でも調べられます。四字熟語の中でこれだ、というものを選びました。あまり努力を強いるようなものは好みではありません。かと言って時代にそぐわないものもいけません。探しているとちょうど今の時代にマッチした感じの言葉が見つかりました。

冬の新潟から飛行機で飛ぶ時、厚い雲の中をくぐって上空へ抜けると太陽と蒼空が広がっています。

正に「雲外蒼天」。

新型コロナウイルス感染症などで、今は暗い中を必死でさまよっているような状態ですが、きっと一歩抜け出したところには、蒼空が広がっていることを信じたいと思います。

この文集が今後とも長く続けられるよう、皆様の益々の御協力をお願い申し上げます。

令和四年十一月

目次

題字　元井栗小学校校長　故　安中久雄（俊道）

はじめに……井栗公民館長　五十嵐章雄……1
聞き書きレポ」……藤崎ツル……4
大河津分水工事のこと……村越允弘……9
汝の孤独の中へ……鶴巻千城……13
逆さの中に真実が視える……木戸賢吉……14
藍と紅花……酒井文男……15
破天荒な父と……思い出の百日紅……19
麗楽ちゃん　お疲れ様　ありがとう……遠藤カツ子……20
私の山歩き、山ある記　六……菅原昭子……24

祖母と孫……田辺一也……28
佐渡ヶ島の川柳　～夏の日～……旭小学校 六年生……29
作詞　理容ふれあい音頭……長橋正宣……30
作詞　おとうさん……長橋正宣……30
俳句「つれづれ」……鶴巻ちしろ……31
俳句……伊久礼俳壇……32
俳句　四季……久和原賢……33
あとがき……発刊委員長 石岩男……36

掲載順不同

「聞き書きレポ」

聞き書きレポ」とは、地区の方から昔の話をお聞きしそのままの言葉でまとめたものです。昔の話（体験）を次世代に伝える貴重な記録となるはずとの思いから企画しました。

お話をお聞きした方

話し手　藤　崎　ツ　ルさん

聞き手　五十嵐　章雄

五十嵐　昔は親が仕事する時、赤ちゃんをちぐらの中に入れて育てたと聞いたことがあるのですが、どうだったのでしょうか。

藤　崎　私が小学校二、三年の頃か、学校からあがってくると下の子をちぐらから出して背中にぶて遊びに行った。そのちぐらには手も出ないようにしてね足こうして手をこうして入れてた。少し大きくなると手も出すようになるけどね。手を出すと掴まってぬげてるもん。

※ちぐらの中に赤ちゃんをあぐらかかせて、手が抜けないように布団を撒いてすき間が無いように詰めていた。

ちぐらから出すとおしっこをしているからアンモニアの臭いがすっげするんだて。ちぐらの中もおしっこで漏れてもいいように、灰ね（アク）、山の方は炊きもん炊くから、アクがいっぺ出るんて、そのアクを布袋の中に入れて、漏れてもいいように下に敷いておく。濡れると新しいアクに変えて、濡れたのは畑に持って行ってあけとけば肥料になる。昔はシメもあてていたけど良いオシメでもないしシメカバーもないからね。布団めくると目が開けてられないくらいツンとして、そこから出してシメ変えて、ぶて遊びに行く。帰ってきてお昼ご飯食べる時間になると、縛らんでちぐらに飛び出ないようにしてただ入れておく。ちぐらから首出しているから、まんま食べさせてね。昔は囲炉裏があったっけ、危ねかったの。泣いているような時には、ちぐらの下にこの位の棒をこうておくの、ちぐらに付いていた縄で揺さぶってね。

五十嵐　揺りかごみたいな感じですね。大体火傷とかの傷ができているのは同じ所でしたよね。縁側から落ちるなんて日常茶飯事でしたしね。

藤　崎　ちょっとした傷なんてマムシ酒を付けとけばいい言うてチクチクと塗ってね。私ら生まれた頃は今みたいにストーブなんかねからね。囲炉裏に落って火傷した子いっぱいいたもん。木が枯れて木の根っこが出るでしょ。その大きい根っこを囲炉裏に入れておくとね、四時間も五時間もチクチク燃えていた。だっけ危ねんだ。そこで餅焼いたりサツマイモ焼いたりして、おやつ代りに食べさせられたん。買った菓子なんか何でもねかったよ。餅なんかフーって膨らんでしぼむ時にアクも入るんだて、あっついのはたいて、アクなんかちっとくれ食べたってなんてことねから食べたりさ。私ら学校に行ってる時は親がまだ若いから仕事しんばだめらっけ、赤ちゃんはちぐらからまだ出て遊ばないから、ちぐらん中入れてほいこもんでそのまま仕事してらった。そこに入れておけば安心

なんだわ。入れていたのは歩くまで、ハイハイする時分だろうね。歩くようになれば力もあるしさ飛び出っちもうしね、大体どの家も猫を飼って猫が子どもと寝ていたよね。

五十嵐　外の畑仕事する時もちぐらに入れて家に置いてたんですか？

藤　崎　そうそう、畑とか。親は働かんばだめらっけ、ざいご、田舎の子ははみんなちぐらで育ったと思うよ。一服になると親が来てそのまんま(ちぐらにいれたまま)乳飲ませて、その時シメ変えてくれる人もいるけど、変えてくれないとね、お昼に帰ってくるともうがっちゃがちゃ。昔蚕をこうたったろ、いいのは供出するけど悪いのは家で茹でて水に浸して、こうやって釘ぶって広げて真綿こしょたの。その真綿でね帽子作ったの。あれあったけっけ。その帽子を子どもにかけていたね。歩くような子もぶて守りっ子させられた。ぶて遊びに行くと、そのぶてた帯を子どもの腰と木に縛って遊んでいた。縄跳びもしてしさ、石けりもしたいしさ、遊びてけど子どもぶてると出来ねろ。みんなそうらったよ。お宮があればお宮の杉の木にみんな紐縛ってさ、石ころ口の中に入れてみたり、口の周り泥だらけにして。それでも子どもは育つんだて。よくしたもので飲んだりしなかったんでしょ。うちなんか、外に雪がない時、むしろ敷いてハイハイするの出しておくと、囲炉裏でたきもん炊いた残りを外に出して水かけておくんて、消しごになるの。それで口の周り真っ黒くして、それでも育ったんだて。

五十嵐　いつ位からちぐらに入れなくなったでしょうかね。私はちぐらの思い出はないですね。

藤　崎　子どもをちぐらに入れて育てたのは自然消滅したんねかね。今ちぐらは見ないよね。だんだん豊かになってくるし、子どもも少なくなってくるし、私らより年取ってる人がよくわかると思うよ。ちぐらは冬仕事に家で作ったの。ちぐらもきれいに作る人もいれば、触れないような物作る人もいる。器用な人は紙で作ったようにきれいに作った。冬は仕事がねっけ、荷縄いうて荷物を縛る縄をぬったり、今のカッパの代わりに蓑を作っていた。学校行くとき深靴(藁靴)履かせられたんだよね。朝になると囲炉裏の所であぶってくれるけど、歩けばまた濡れる。そんげの履いて行っていたんだよね。今は除雪言うけど、こんげ細い道だったもの。そこ歩いていくとマントの裾に雪がふっついてぶら下がるんだて、あんげの道は今だと歩かせらんねこて。今は雪のけて広くても文句言うものね。雪で濡れないと深靴は暖かい。雪が凍みたときに凍みわたりで山超えて学校行ったこともある。靴は各組(班)で一つか二つしか配給で来なかったし、それもくじ引きしたの。

　どこの家も、朝仕事に石の上で藁を打つ音がするんだ。藁をスグって打って、その打つのも、私らのときは木で作った横ヅチいうので石の上で打ったの。しばらくすると機械で打つようにっなたけど、その機械も部落で順番で使っていた。

五十嵐　友達の家に遊びに行くと、玄関の隣に小さい藁小屋があって、その家のじいちゃんが縄をぬったり、横ヅチで藁を打ったりしていましたね。

藤　崎　昔は家(うち)のせがれを「あんにゃ」言うて、あんにゃどもなんてさ、

やっこした藁持ってある家に寄ってしゃべりながら縄ぬうたり、藁仕事したりいたった。今はそういうことがねっけね。今日はどこどこの家でとか、将棋してたり何にもしないで酒飲んでたりしてたみたい。今はそんげことしてないからどこの家の子らか顔がわからねもんね。隣の人の顔も見た事ないと言う位だからね。ある時、若いもん集まって綿羊を食べてね。誰かが「うんめぇ肉らなぁ、何の肉ら？」言うたら、誰かが「メェー、メェー」って鳴いたってさ。みんな青なってゲェーゲェー言うたって。今はほんに親しみがのうなった。

五十嵐　今はみんなで寄って何かをすることは年々無くなってますよ。

藤　崎　私兄弟が七人で着物のいいの着せらんねでさ、こうやって鼻水拭いて、ここらガボンガボンして光ったような着物とか、次から次へとおろして着せられてた。だっけこれも何かになるなって、物を捨てるのが今でもできねんだ。服を捨てようと思ってビニールに入れて農舎まで持って行くけど、畑して雨とかで濡れるとそこから出してまた着るろ、洗うからまた服が家に来るんだて。捨てようと思っても捨てられない。だっけ今の若いもんに怒られんだ。「ばぁちゃんばっかしゃ、散らかしてどうする気ら！」って、要らねものはみんな捨てれって言われるけどね、みんな思い入れがあって捨てらんねんだよね。

五十嵐　物がない時に育ったからでしょうかね。

藤　崎　そうなんだよね、自分の物を切って何かにするのは出来るけど、捨てるのはできない。昔と今全然考えが違うからね。私の父親は、母親が子どもばっか産んでいたから仕事ができねでしょ。田んぼ耕地整理してねっけ、畦にみんな豆植えてあるんだて。その豆の葉っぱ落ちたら引いてきて落して売るんだこてね。その豆引くのなんかね、朝引き終わったら鳥がコケコッコー言ってたって。それほど稼いだんだよ。昔は山もとだと千枚田みたいに、田んぼが小さいのばっかで、畑は尚更小さい。今は耕地整理して綺麗になっているけどね。畦に全部豆植えたんだよ。草取りをしたり、親は切なかったろ。手で豆を落として地面に落ちたのもみんな手で拾っていた。今は金出せば何でも買える。

　学校からあがってくると、稲刈だったら、その前に刈ってあったのを運ばせようと思って、はよあがっこねかと待ってるんだよ。遊んでいこう言うても、誰か一人真面目な子がいて遊ばないで帰るから、何して遊んでたんだって怒られんだ。私ら家に行くと仕事させられるでしょ、山行って栗拾ったり、桑の実を取って食べたりして遊んで、家には遅く帰ろうと思ってた。遊んで帰ってくるとちぐらから出して守りっ子してた。でも守りっ子の方が仕事させられるより良かった。そんねば山にシバ（炊きもん＝木の枝）取りに行って来いとか言われてさ、縄で背中にぶて来る、シバ出しさせらた。それも朝学校に行く前にシバをリヤカー載せて親が引いて子が押して三条まで歩いて、売りに来たんだよ。下田の山の方だからね。なら遊びに行くんだったら、木ぶて来いって言われて。中学校卒業近くになると里の方から予約しに来る。そうして中学出ると里の方に住み込みでみんな働きにいった。言葉にすると「若いしょ」とか「女ごしょ」とか、言うてね。その家の子とおんなじに小遣いもくれるし、着るもんもこうてくれるし、向うの家の嫁になるのもいたね。親

がお盆とか正月にまとめてお金を取りに来る。働いた金を親がみんな使うてさ、そうやってたんだね。

五十嵐　山で遊んだり、シバを取りに行くと蛇とかいたのでは？

藤　崎　蛇やカエルなんていたこてさ。カエルは食べたもん。今はいねなったろかね。赤いカエルがいたんだ。子どもの時「かなんぎゃく」言うて、しかも大きいんだよ、皮がツルツルしててねどくどくしい臭いがするの。そのカエルは薬なんだって。皮剥いて火に網渡して焼いたり、干して焼いたり、大事なカルシウムだったんだろ。そういえば今は見ねみてらね。

五十嵐　今はカエル少なくなりましたからね。

藤　崎　せんがんむし」って知らね？　山行くとね、チョロチョロって水が落ちる綺麗な水たまりがあるんだて、そこに小さいオタマジャクシみたいなのがいるの、それが食べられる虫なんだて。大きくなるとカエルと同じ足も尻尾も出て来る。それを焼いて食べた。それを小さい時みおけた(卵からうまれたこと)ばっかのを飲むと泳ぎが上手になる言うて、それとってよく飲んでた。

五十嵐　泳ぎは上手になりました？

藤　崎　ぼこぼこ潜った。川もあるしなんでもあるんだけど仕事ばっかさせられて、遊ばせらんねかった。山だったから、マムシもいたった。それ焼酎の中に一本入れておくの。傷口はダメだけどぶったなんかいうのは良かった。ムカデも効く言うたよ。子どもん時そんげのばっからった。腫物ができた時はマムシの皮干して、その皮を貼ると膿が出るとか。ドクダミはハチに刺された時葉っぱを揉んでつけたりとか。干して風呂に入れたり、お茶にして飲んでる人もいる。餅草だの、蕗の葉っぱだのさ、げろっぱもみんな薬なんだよ。げろっぱはオオバコ。げろっぱのトウがでるでしょ、あのトウで相撲取りしたり。蕗の薹なんか土手にも有ったけど、除草剤で無くなったね。遠い山まで取りに行ったら、それ取るなおれん家のだって怒られてね。

五十嵐　今は「取るな」っていう看板出ていますもんね。

藤　崎　山に入る人はいいことしてくるならいいけど、今は悪いことしてくるからね。シイタケあると木まで持って行くってね。聞いた話だと、ばさまに水くれいうて、家の中に水を取りに行ってる間にゼンマイをむしろごとくるんで持って行ったってね。そういう悪い事するんだよね。私の生まれた山はタラノ芽がいっぱいあったんだてね。そしたらノコギリ持って行って、みんな取ってしもたっけ、ねえなったよ。

五十嵐　コシアブラも根元から切っていきますからね。

藤　崎　コシアブラは芽が一つずつしか出ないから、それを根元から切って行ったら次は芽がでない。妹は魚沼の方に嫁に行ってね、そこの山もんはルールがあって、沢にだれか入っているとその沢に入らんで別の沢に行くんだって。その後取っていくってことしねんだってね。

五十嵐　山を歩いて怖くないですか？　マムシもいますけど。

藤　崎　ある時石の上にとぐろ巻いていたことがあって、尻尾でパタパタしてるんだて、マムシ見ながら後ずさりして下がったら崖があってストンと落ちた。マムシはいじったり踏まんば襲ってはこないね。昔マムシ買うとこあったよね？

五十嵐　一ノ木戸にありましたね。

藤　崎　マムシ瓶の中に入れていっぱい売っていた。実家の父さんは、腹のでっかいマムシ取った時、焼酎に入れる前に毒出しするんだけど、そしたら子どもが生まれた。蛇は卵だけど。マムシってお腹でふ化して産まれるの、産まれたマムシはでっこなったら取る言うて山に放したって。人生思い出すと色々あるね。

五十嵐　今日はありがとうございました。

大河津分水工事のこと

村越允弘

明治三年四月、政府は信濃川の水害関係の各藩、農民の嘆願にこたえて分水工事を開始することにした。この工事費百万両のうち、水害地分担金は四十五万両と決められた。

その割当は

○十六万百七十両二分二朱　新発田藩
○三万五千百七十二両三分　高崎藩
○七万八百四十五両一分二朱　村上藩
○三千八百三十五両三分二朱　長岡藩
○六千三百二十四両一分　与板藩
○九千三百五十三両三分三朱　三根山藩
○四千三十五両一分二朱　◎三日市藩
○十三万七千三百五十三両三分三朱　新潟県
○二万二千五百両　柏崎県
〆金四十五万九十二両二朱

右の割勘を見ると、水害の最も多かった新発田藩の負担が大きいことがわかる。そのころ旧井栗村と下条東村、下条西村は大庄屋松川氏の支配下で、三日市藩領であった。領主大庄屋から分水工事の負担金として管内村々は、高壱石につき金壱両づつ調達上納せよとの命があったのであり、これに対し三ヶ村の村役人（庄屋、組頭のこと）百姓代（百姓惣代ともいった）が連署して大庄屋、松川藤蔭に嘆願書を出して、御用金の免除と工事に出役する人足の中飯・米・味噌・それに人足往復二日分の賃金は、大庄屋様から引き受けていただきたいという旨を書いている。この中でくりかえし農民の窮状を述べているが、それは明治戊辰戦争で井栗、下条村の農民は人夫に狩り出されたり、諸雑費を徴発されたりし、同年五月には信濃川、五十嵐川の洪水で作を流され、続いて翌二年は前代未聞の大凶作に痛めつけられて、飯米に事かくという悲惨な状態にあったからである。

この嘆願書は

「恐以書附奉願上候」

井栗の山田家（当時の庄屋格）に保存されている「新潟県御用留」明治五年記録によるものである。

「恐れながら書附以て願い上げ奉り候」

御管内、井栗、下条東、西村三ケ村の村役人並に百姓代一同申し上げます

明治三年三月信濃川分水路掘割によって、これからは水患のがれと安堵いたしております

そこで御管内村々に対し、高壱石につき壱両づつの割で連々調達上納とのこと承知いたしました。しかしながら、一昨年は長い間、与板、長岡口の戦争、近くは保内、下条の両所、会津口の御戦争のため、莫大の人夫、諸雑費がかさみ、もっとも、この中追々に御手当金等をい

ただきましたが、仲々以て足り申さず、そればかりか同年五月には信濃川の出水で、高崎藩御管内田島村の堤防が切れ、井栗村は皆流れ作、下条東、西村は山裾高場の外は皆流れ作となり、昨年は前代未聞の大凶作でありまして、その度毎に過分の御手当米を頂戴仕り、お陰様で大前はともかくこの場をしのいで参りましたが、何分小前は生活が苦しく、よんどころなく、先般は御拝借をお願い申し上げた次第でございます。

このたびの御普請御用途金のことでございますが、おそれながら百姓難渋のことを、その筋へ嘆願中のところ、五月中等分け御用金仰せ出されました。実は分水掘割という、大行の御普請はとても成功相成らずとか、衆人の口に惑わされて、出銀難渋願いを差し上げることについ遅延してしまいました。

寺泊詰の惣代御用の趣につき、当分の心得として、井栗組頭見習い、藤太を差し出しおき、その後代り合として、下条西村庄屋、小島太兵衛を差し出しおきましたが、同人も用弁方へさしむけられ、惣代を空席にしておくことも出来ず、そのまま両人とも務めております。太兵衛、藤太は銘々宅よりの才覚持参金も使い果たし、今月十日、両人の詰先より雑用金を送ってくれるように、村々宛へ手紙をよこしましたので、十四日右金を井栗村でそろえ、十五日持ち送らせることに村役人共で打ち合わせましたところ、天神林村にては、日延べ十六日十両を送り越し、井栗村は重立百姓へ才覚申し聞かせましたが、わずか十五両持ち来たり、のこりは都合できないとことわり、下条東、西村は先達て小島太兵衛に両度金三十両、取替え渡し置いたから、当節、才覚いたしかねるとの区々のことわりでありました。十八日、山田硯太は、下条両村へ立越し、共々集金後に百姓たちに考えをききただしたところ、水患の事と、寺泊詰は斬割りが当然なるにかかわらず、仕例を破り新法の高割にされたのでは困りますと、一向に承知しません。井栗村の百姓も同様のことを申し、出金いたしません。さりながら寺泊詰は追々交代されることとしても、太兵衛、藤太もいつまでも差し出しおき、雑用金迄送り届けずとあっては相済まぬことであると、くりかえし申しきかせましても、一向に取り合わず、はては勝手になされよと、などと、以っての外の申し分には、村役人共においても、新規高割と申す儀はとかく決着仕らず、差し当たり惣代雑用金、出金できずとして、そのまま捨て置くことも出来ませんので、とりあえず、山田藤太、太源治は同道寺泊表へ立越し、太兵衛、藤太には有体ことわり、御出役、依田少参事様、御旅館へまかり出て 当月六日より、村々一人づつ差し出した人足とても七日交代の見込みで、飯米、味噌持参するよう惣代より申越しありましたが、何しろ窮迫している、百姓前としては、味噌持参できかねるとのことで、よんどころなく交代毎に、人夫一人につき金一両づつ渡すこと、人夫は精々骨折り働いても、其日仕舞にはならず、翌日へ持ち越し賃料は、玄米一升七合とおきめになってこと、それでは人夫に出た家の残り家族は食べていけないと申して居りますが、もっともなことで、さりとて右の家内へ相当の手宛金と、往復二日の賃金並に人足宿の宿賃、蚊帳、

もっこ等までも、村々の負担となりましては、とても出銀の手段はございません。」とこまごま申し上げましたところ「用弁方は勿論惣代としても引取らせるわけにはいかない。しかし前段の始末は、三日市表（領主柳沢彰太郎）へ申立てることにする。先ずは太兵衛、藤太は勿論当節わずかの人足差出しおき、不都合なきようにせよ。」と御手厚いご理解を請けましたので、右両人は帰村早々村々の百姓前へ申し入れましたところ、右丈けは仕例の斬割で差出すことはできますが、御普請手始めに、村々から多分の人足を差出すようにと仰せでございますが、前行申し上げました通り、御戦争以来莫大の雑費と、その上出水のため皆流作、続いて大凶作となり、百姓高前の者とても、今年の取入れまでは喰足り申さず、中前以下は申すに及ばず、よんどころなく、御拝借米願い上げましたところ、御仁慈を以って、此度はモミ御貸付けされましたので、小前へ配当いたしましたが、この先の見込みはなく、さりとて連年の違作で才覚の手段もつき果て、高前、小前、共一同窮迫しております折柄、大行の御普請人足は、御きめ通り七日交代、往返共都合九日の処へ、おそれながら賃料玄米一斗一升九合で頂戴いたしたのでは、勤夫喰料だけで、妻子は喝命（飢え死）の及ぶ外ありません。御普請中、一村一人位の人足でしたら、交代毎に、壱両金づつ与えることはできますが、大勢の人夫へ同様、壱両づつ与えることになりますと、忽ち村の動乱となるのではないかと心痛いたしております。何卒御慈悲を以って、前段の始末お聞きとり下され、寺泊詰用弁方、惣代外、人足才番人、並に人足宿家賃、蚊帳だけ、仕丁の斬割に、村々出銀其餘等分け、御用金其外人足詰、中飯、米、味噌、人足往返二日の賃金共、恐れながら御引き受け下されますよう願い上げ奉ります。

右願いの通り幾重にも、村々百姓一同伏して懇願申し上げる次第でございます。

以上

明治三年七月

下条東村百姓代　　権左衛門　印
組頭見習　　太源治　印
組　頭　　宅　助　印
組　頭　　太右エ門　印

下条西村百姓代　　喜　八　印
組　頭　　善　七　印
組　頭　　儀左エ門　印
庄　屋　　小島太兵衛　印

井栗村百姓代　　八兵衛　印
組　頭　　雄　吉　印
庄屋格　　山田硯太　印

大庄屋所

この嘆願の結果はどうなったかは記録にないし、どれくらいの人夫が

出役したのかも、不明である。しかし分水堀割工事は予想以上の難工事で、工事が進むにつれ、掘れば崩れる、いわゆる妖怪丁場などという、難工事も現れ、いつ終わるのかという嘆事ももれるようになった。一方渡辺悌輔等の分水騒動も起きて、工事は一先ず中止となり、出張官吏は東京にひき上げた。その後明治八年三月、政府は外人技師の測量結果をまって、大河津分水工事の廃止を布達してきたのである。

明治三年四月に始まった、分水堀割工事は三年余り工事が進められたが、何等の進展を見ることもなく、ついに工事は放棄されてしまった。その後、又々幾度かの大水害に見舞われ、蒲原郷民は窮乏の度を加えていったので地方有志一丸となって分水事業施行継続騒動がくり返されていった。

大竹貫一（中之島出身の国会議員）等の尽力によって、再開されていった。

明治二十九年（一八九六年）の「横田切れ」などでの再開で、二次工事が明治四十二年（一九〇九年）本格化され、東洋一の大工事と言われ十三年目の大正二年（一九一三年）通水をされ、今年で一〇〇年との事で、全工事が完成されたのは昭和六年（一九三一年）で、水害の多かった地域は感謝の祝の日としている。

嘆願された事が如何に生かされただろうか、その詳しい事が不明であり、原本も最近は不明となってしまった。戸籍制度の前の宗門人別帳よりも探してみたい。

三条歴史研究　第二十一号　より

汝の孤独の中へ

鶴巻千城

才能は煩悩の増長したものである、と言ったのは芭蕉で、俳文「閉関之説」に「煩悩増長して一芸にすぐるるものは是非の勝る物なり」と記している。

イエスの「山上の垂訓」に比して、釈迦の「山上の説法」がある。釈迦は「すべては燃えさかっている」という。むさぼりの炎に、いかりの炎に、おろかさの炎に。これが煩悩の炎である。俳諧という自己表現にとらえられ、どうにもならない自分を見つめる芭蕉の「無能無芸にして、ただこの一筋につながる」とは、煩悩の嘆きの表白である。

芭蕉をさかのぼる約三百六十年の「徒然草」に、兼好は、才能は人間のもろもろの苦悩・煩悩が増大した結果の産物であり、欲望や愛憎の気持が心を苦しめて努力する結果、人の能力がみがかれる、と書いている。兼好はつづけて「まことの人は智もなく、功もなく、名もなし」という。ここに煩悩のかげりはない。これを敷衍して、芭蕉は、利害得失を超越し、老若をわすれ、無為自然の境地にひたるこそ、老いのたのしみというものであろう、という。これは荘子の思想をふまえたことばである。

鴨長明は『方丈記』の末尾に「俗世間からのがれて、山林に住むのは、心を静かにおちつけ、仏道を修行するためである。ところが、私は、姿は聖人に似ているが心は濁りにそまっている。これは迷いの心のため、狂っているのではなかろうか」と自問している。芭蕉もまた、ある時は官吏となって俸給を得たいとねがい、またある時は仏門にはいって僧侶になろうかと思ったこともある、と断ち切れぬ煩悩を告白している。こうして芭蕉は世俗への執念、風雅への執着に迷いつつ俳諧一筋につながっていった。

迷妄にとらえられ、悟りきれない芭蕉は、煩悩の人であった。煩悩の炎を消せず、とうぜん涅槃に到達することなどできはしない。もろもろの因縁を捨て去ることはできず、煮えきらず、優柔不断、不徹底、それが芭蕉の姿であった。それゆえにまた、おのれの生き方についての芭蕉の苦悩は深い。芭蕉を「俳聖」と呼ぶ人は多い。たしかに彼はすぐれた俳人である。しかし知徳にすぐれ、事理に通じた聖人というより、むしろ、世俗にまみれた凡夫といっていいであろう。その自覚による自己探求が、芭蕉を芭蕉たらしめた。

文学はもともと個の営みである。自分の内部へ深く降りてゆき、人間的な認識をたぐりよせるなら、すべてに共通する文学たりうる。芭蕉が仕官懸命の執心、仏門への願いを捨てる、とは、体制外に生きる、つまり社会的な孤独をえらんだ、ということである。芭蕉の文学の奥深さと広がりは、社会的な孤独にとどまらず、自己の孤独に沈潜することによって獲得された、と私は考える。ニーチェは小さな市民社会を否定し「逃れよ、汝の孤独の中へ」といった。

逆さの中に真実が視える

木戸賢吉

魔の十一日、これは単なる偶然だろうか。九・一一から、アメリカは、名ばかりの民主国家になり下がった。アメリカンドリームは過去のものとなる。日本も三・一一より米国と同じ道を歩き始めたと視る。

福島原発事故より二年余り前、原発廃止等の願いを込めた本を、全国の図書館に贈った。だが、思いは通じず三・一一が起きてしまいました。

後世を考えると、原発は廃炉議論しかない。適正な判断を下した科学者の意見を無視し続けた結果、廃炉費用が国家予算を上回る可能性は極めて高い。さらに健康被害も避けられない。

ドイツ等は脱原発に舵を切った。日本は、未だに再稼働へとひた走る。俯瞰すれば、原発にしがみつく人達は、金欲で麻薬患者のように視える。政府(国)は必ず嘘をつく。ロシア人の視点から、政府を信じる国民を信じられない」。

残念ながら、国民は家畜と同様です」と、ある元町長は語る。原発は造る時も、事故を起こしても同じ連中にお金が入る。戦争も、武器を売って、戦場に兵士を送って、さらには破壊した町の復興でも儲ける。原子力村と戦争に共通していることは、巨額の利益が効率よく回り、命が軽視されている。わずか一%の人に九九%が動かされ、より貧困に向かっていく。

政治に民間人も登用される、真の民主主義を願います。

地球環境を思う時、沸騰したお湯にカエルを入れると飛び出すが、水から弱火で熱するとカエルは死ぬまで入っている。慣れは普通に見える(視える)ことを失ってしまうのだろうか。

藍と紅花

酒井文男

朝のテレビではどうも時々雨の予報だ。稲刈り前の除草剤散布は乗り入れと農道の路肩を残したままなのだが、雨ならそれもできはしない。お盆休みの最終日の今日は、来客はないだろうと予想がついた。多忙だったお盆前は気持ちのゆとりもなかったから気晴らしに久々のドライブでもするかと、小生は決めて妻を誘った。

『ねぇ、今日出かけないか？　河北町へ行きたいと思うんだけどね？」

『カホクチョウ？　どこよ、そこ」

『凹形の河北町だよ。紅花資料館があるんだ。今年植えた種は、そこの町の河北べに花会から買ったんだよ。ネットで調べた通りに花を摘んで紅餅にしたけど、これでいいのかどうか本物を見てみたいんだ。そこにはきっとあると思うんだけどね、本物がさ。それに染色の方法も具体的にわかると思うんだよ」

『あなたが運転手ならどこへでも行くわよ」

妻は知っている。道楽で買った軽のミッドシップのツーシーターで行くのだろうと。その車はオープンにもなるのだが雨天は当然できない。

余談だが、妻はオープンにするのが嫌いだ。『どこがいいの』というのだが、小生は『陽好がいい』ただそれだけだ。元来趣味の世界というものはそういうもので、生産性とか経済性を求めれば成り立たない。昨年も植えて今年も一回乾燥葉を作った藍もそうだ。

藍染は明治初期にヨーロッパから輸入された安い合成染料のおかげですっかり姿を消した。現在身に着けている全ての染め物（伝統工芸品を除けば）は石油や石炭から作る合成染料である。

天然染の場合、綿はなかなか染まりにくい。草木染などで良く染まるのは絹であって、綿は一応染まるのだが色落ちが激しい。

染まるということは布の繊維の分子と色素の分子がイオン結合することらしい。絹は蚕が作るタンパク質だから電荷が強いが、綿はその電荷が弱い。小生も、ミョウバンや牛乳で定着しないかと色々と晒を染めてみたのだが、洗っているうちに最後には白くなってしまう。その点、藍染は電荷の作用ではなくて繊維に絡みついて落ちにくくなるようなのだ。

そして、染液に着けてから絞って青く発色するのも、水に溶けないインディゴが還元発酵で溶けて空気に触れて水素イオンを放出する時の化学変化の現象なのだという。

江戸時代から綿が普段着の庶民は、色が染まって落ちにくい藍染を用いていたことには納得できる。しかも、濃淡や色合いの違いで四十八色もの名前がある。藍染であふれていた人々の姿を、明治期に来日したイギリス人科学者がそれを見て藍色を『ジャパンブルー」と名付けたのはそのことが理由だった。

天然藍染は防虫効果もあり繊維も強くするらしい。反対に合成染料は生地を弱くしてしまう。そういう理由もあって去年藍染に挑戦し

たわけなのだ。結果は「引き分け」と言える。小生の負けず嫌いという訳ではない。ちゃんと染まったのだ。ただ、二～三日染液に漬け込んでの話である。

発酵が弱いその原因はほぼ確定できている。小生は、天然発酵の時のペーハー管理と温度管理に失敗はなかったと思っているから、原因はきっと微生物が繁殖するための栄養不足ではなかったのかと考えている。負けた気がしないという理由がそれであって、今年はちゃんとした染液が作れるだろうと思っている訳なのだ。

しかし、とにかくそこまで行く過程の手間暇を考えたら、天然染が衰退して行った理由は良くわかる。晒一本染めるのにどれだけの乾燥したダテアイの葉がいるのかは、おおむね一人で茎から葉をちぎって一日では足りない、二日はかかる。最低でも三キロの乾燥葉がないと発酵がうまくいかないようなのだ。

「あなたの趣味なのよ。私は、本当は付き合っていられないのよ。畑の手伝いなんか、あなたはちっともしてくれないのに……」

そういって、妻は小言を言いながら今年も葉をちぎっていた。言わずもがな小生は義理堅いのだから、ちゃんと畑の作業も要請があれば出かけるようになったではないか。そうは思っているのだが、小生の主観に過ぎないことは否めない……　かもしれない。

そこへきて、さらに紅花である。いろいろな野菜を作って、食卓に貢献しているその足しげく通う彼女の頻度とはかけ離れている小生だから、言われて当然だろうと認める。花が咲くまで三回ほど通ったくらいだろうか。

「間引かないとだめよ」

そういわれて、畑に直播の栽培をしたことがないからハタと気が付く。

「草が生えて来たわよ。取ったらどうぉ？」

紅花が負けそうになるほどの草丈になった。しかもその草がよたよたして大切な紅花に寄りかかっているではないか。たった三畝の草を取るのに疲れてしまった。何せしゃがんでの作業は、小生大の苦手なのだから。

「倒れてくるわよ、紐で囲わなきゃだめよ」

「自立しないのか？」

「紅花って菊でしょう？　かまわないでおけば倒れるわよ、もっと丈が伸びるんだから。倒れたら花どころじゃないわよ」

そりゃ困る。いったい何を持っていけばいいかもわからない。知らないの？」なんて、半分からかわれて道具をそろえ、同行してもらい手ほどきを受けてようやく始末する。その後ずんずん伸びて胸以上になったから、確かに必要だったとわかった。

収穫時期は七月上旬からと書いてあった気がするがすっかり忘れていたので聞いてみた。

「花が咲いたかなぁ」

「たまに行ってみれば？　結構咲いているわよ」

慌てて資料を見ると、七～八分咲きの花を摘むとあって、咲き過ぎ

は摘まないらしい。紅餅にするには早朝の朝霧が残るころに収穫するようだから翌朝に決行しようと決めた。

アザミに似たキク科の紅花にはトゲがある。花を摘むときはそれが痛くて素手はもちろんのこと腕まくりもできない。摘み頃は咲いてから元の方に少し赤みが差して来た時で、花は一斉にその時期を迎えるのではないから日をずらして摘むようだ。だいぶ咲いているが、摘み頃と思われるのは確かに半分程度で、中には時期を過ぎたものもあった。

摘むのを手伝ってやろうかぁ？」

「うん、頼む。助かるよ」

正直に感謝をする。摘むのは簡単なのだが花の数がある。いわゆる手間がかかる作業なのだ。それに時期が短いときているから、写真で見るような一面の紅花畑では、眺めは爽快だろうがこの作業のことを思うと尻込みをしてしまう。たった三畝だが、早朝のそれを繰り返すこと三回くらい収穫した。

摘んだ黄色い花はすぐ洗って一日置くと赤くなるのでそれを揉んで平たくして、乾燥させて紅餅にして保存する。染色には染めるものと同量のそれが必要のようで、百グラムを超えたかどうかの程度だったから、着物を染める紅花の量を想像すると気が遠くなる。

ずいぶん遠回りをしたが、その紅餅が果たしてあの状態でいいのかどうかを確かめたいと思ったので、河北町の紅花資料館を思いついた次第なのだ。

軽く提案したが、片道四時間以上かかる。一日目いっぱいの工程なのだが、ドライバーは小生、それもお気に入りの車であれば妻は隣に座って初めての景色を満喫していればいいという訳だ。小生も、行き帰りの八時間少々は一人じゃつまらないから助かったと思ったがコメントは省略しておいた。

運転は苦ではないのだがやはり時間がかかる。途中、トイレ休憩も、飲み物の購入もあるのでその都度予定時間は超過していったが、ナビは正確だから道に迷うことなく目的地に着いた。紅花資料館は富豪の堀米士四郎兵衛の屋敷跡で、建物が数棟あってそれぞれに江戸時代からの武具や生活用品が展示してあり、小生には興味が尽きなかった。

外には種を取るだろう紅花が枯れたまま畝に残っていた。紅花は細い畝に一列ずつで、その列の中に倒れ止めの棒を所々に立てて挟むように紐を回してあった。小生の畑は一畝二列に植えたから倒れ止めも頑丈にしなきゃいけなかったし、幅が広くて摘み辛かった。やはり来てみて良かった。畑をあちこち見て回っても同様にしてある。来年はそうしよう。

「ねぇ、勝手に畑に入っていいの？」

「参考になるなぁ。見るだけなら構わないだろう？　花も終わっているし」

そこは伝統を継承するために栽培しているようで、紅花染めの教室も開かれているらしかった。染色は水温が低くないと赤い染料が安定

しないと資料にあった。やはりそのようでその建物は誰もいなくて硝子越しに外から見ても作業の形跡はなく、閑散としていたから水温の高い今頃は休業中なのだ。

紅花には水溶性の黄色の染料も含まれているので最初にそれを水に溶かす。黄色はそのまま染められる。次に、目的の紅色は水には溶けずに残っているので強アルカリ液に抽出させる。

話は戻るが藍染も発酵には強アルカリ液で還元発酵をする。藍といい紅花といい、強アルカリ液を使うのだから染色に灰汁は必要不可欠だったのだと知る。しかも灰汁は普段の煮炊きや暖を取るたびにできるし、染め終えた残りは植物だから畑の肥料になる。昔は生活の中で循環する仕組みが出来ていて無駄がなかったのだなと納得した。

「あったよ、これこれ。同じだよ、作ったのとさ」

小生は展示してあった紅餅を見つけて感激した。少し小ぶりで少し強く練ってあり、厚みもあった。まったく百聞は一見にしかずである。その後の染める工程も、経験などないから知識のみで心配だったが、小生がやろうとしていた順序は展示の説明を見る限りおおむね正解だ。失敗はしたくない。何せ、今度染める生地は晒よりも何倍もの値を張る絹だからなのだ。

それほど広くはない資料館だったけれど、一時間半以上はそこにいたようだ。出口の売店で工房のストールやハンカチなどもあって、小生もきっとこんな風にできるかもしれないなどと思いを巡らせたのだが、経験もないのに染色をたやすく考える素人の安直な考えだったなと直ぐに反省をした。どれもこれも仕事が丁寧で見事な職人技と分かったからだ。

出来が悪くても小生はいいのだ。栽培からやるということの価値があるのだ。そんなことを思いめぐらしながらの帰路、せっかく山形に来たのだからご当地グルメでも食おうという話になったのだが帰宅時間を考えると、遅い昼食を食堂でゆったり時間をかけている訳にはいかず、コンビニで買い求めて車中で済ました。かなり慌ただしい移動であったけれど、得るものは多かった。

「自信がついたよ。やっぱり来てみるものだね」

「でも、あなたはあんなに綺麗に染められるのかなぁ。失敗したらもったいないわよね、あの絹のストール……」

やりもしないのに失敗から先に考える妻はなんてマイナス思考なんだ。しかし、言えない。紅花の管理もダテアイの管理も、そして葉や花を摘むことも全て彼女の手助けなしにはできなかったのだから。

「心配ないよ、頑張るからさ」

それしか今の小生には答えられない。絹のストールを紅花で赤く染めてプレゼントしようと思って始めたことだった。必ず綺麗に染めてあげるよと西へ向かう帰宅の道中、その色に似た夕日を見ながら心に誓ったのだった。

破天荒な父と

思い出の百日紅

現在私は七十五歳です。井栗で生まれ育ちました。幼少期の思い出として自慢出来る様な話はありませんが、五月十八日の三條新聞『伊久礼』の掲載を見て、そういえばあんな事があったなーといろいろな事が懐かしくなり、思い出として残しておきたいという気持ちになって投稿してみました。家の近所に松川医院という医院があって、そこのお嬢さんと同級生でした。そのため学校が終わると毎日のようにカバンを家に投げて、松川さん宅に遊びに行ってました。彼女は当時にしたらお城のお姫様状態です。私の家は貧乏で私は五人兄弟の真ん中でした。井栗弁で云ったら「ぶちゃりっこ」です。毎日食べるのが精一杯だったと思います。当時はどこのお宅もそんなに差はないと思いますが、特に我が家の父親が破天荒で毎日大酒を飲んで、時には暴れる様な人でした。その頃の自分はなんて不幸なんだろうと思っていました。そんな中でも松川さんに行けばおやつを貰って、家では食べられない様な高級なお菓子もいただいていました。それから毎月少女雑誌やファッション雑誌が何冊も届くのです。彼女がそれを見終わると私の所におさがりしてもらい、今でもハッキリ覚えていますが、デザイナーの芦田淳や中原淳一の「それいゆ」という雑誌が大好きで、可愛いお洋服がいっぱい載っていて羨望の眼差しで夢中になって見ていました。当時父は先生の往診の運転手をしたり、いろいろな仕事をして松川医院に仕えていましたから、毎年大晦日になると父と二人でおよばれしていました。あの頃はまだどこのお宅もテレビなどありませんから、紅白歌合戦を看護婦さん達と大勢で一緒に見せてもらって、帰りにプレゼント(マフラーや手袋)を頂いてました。それがすごく嬉しかったのを思い出しました。父親の名誉のためにつけ加えておきますが、若い時の父は娘の私から見てもイケメンでどこか沢田研二の若い時に似ている様な人で、当時の知り合いから「草木もなびくいい男だった」と聞きましたが、残念ながら私は似ませんでした。その後、土地改良区に勤めて田んぼの区画整理をした図面に色塗りの手伝いをさせられたり、又、近所の飲み仲間を呼んで花札をするんですが、「三人で足りないからお前も入れや」と言われて、おやじ三人と十代の小娘が賭け花札をするんです(今だから時効ですね)。私も結構ギャンブラーでしたから楽しかったです。私は父とは相性が良いのか何かと一緒にいる事が多かった気がします。酒では散々苦労させられましたが、父を恨んではいないのです。むしろ自慢出来る父でもありました。振り返って見たら貧しい生活の中でも他の人があまり経験していない夢のある体験ができた事が幸せだったなと思いました。

不思議と今まで忘れていた事が次々と思い出されて、弟や妹に聞いても「全く知らない見たこともない」という返事が帰ってきて、共感してもらえないもどかしさもあり、私の生きて来た証を残しておきたいと思い拙い文章で恥ずかしい限りですが、思い切って書いてみました。

麗楽ちゃん　お疲れ様、ありがとう

遠　藤　カツ子

令和四年

北京オリンピックも終わった。

今パラリンピックが始まっている。今大会（北京五輪）で女子スノーボードビッグエア競技に出場した岩渕麗楽（いわぶちれいら）ちゃんは私の地元（一関市東山町）出身である。今回彼女のプロフィールがテレビや新聞で紹介された。私も自分の思いを語ってみたくペンを取りました。

二月十五日決勝戦を観た。惜しくも四位でメダルには届きませんでしたが、何もメダルだけがオリンピックではないと思います。そこへ出場するまでの過程も認めてほしいものである。参加する事に意義がある。」とね。彼女の今回の演技はこれまでに世界でも公式戦でも誰も成し遂げた事がないと言う「幻の技」と言われた。あれが人間の成し得る技なのかと感動した。北京大会の大空に一羽の鳥が羽ばたいた。あれは何と言う鳥なのか？　貌鼻渓から飛び立ったナイチンゲエルと言う鳥ではないでしょうか。（貌鼻渓は日本百景のひとつ）

彼女はその近くで生まれた。私はそこから少し離れた村でした。しかし、ゲエルは藪の中が住家だと言うが、環境が変わればどこへでも飛んで行けるのでは？（持論）そしてゲエルは鳥の中では一番綺麗な声で鳴くと言う。

彼女も今にきっと一番になれると思う。だって貌鼻渓から飛び立ったゲエルだもの。私はその地を十八歳で飛び立ち、今年五十九年目になります。彼女は五十年後どこに住んでいるでしょう。どこでもいい「置かれた場所」で自分の好きな事が出来る環境であってほしいと願う。現在法政大の二年生である。毎日埼玉の練習所に通ったと言う、真面目で頑張り屋さんである。その証があの北京での大空での技だった。あれを観た世界中のアスリートはみな泣いた。感動の涙である。やはり彼女にはその才能があるのでは？　いや人間にはその才能や血筋は持って生まれないと言う。だったら何が？　それは練習以外に勝る何物でもないと言う。彼女は言った。

「やはり練習が足りなかった」とね。

彼女は四年前の平昌でも四位だった。四年後必ず又出場します」と約束を果たしてくれた。

今回スケート競技で金メダルを獲得した高木美穂さんは、十二年前最下位だったと言う。それが今回金である。

「人はあきらめなければ夢は必ず叶う」と言った

先日地元の友人に電話した。町は今彼女の話で盛りに盛り上がっていると言う。名も知れぬ小さな町から偉大な英雄が誕生した。我が地元のヒーローだ。彼女はまだまだ若い。今年二十歳である。前途有望だ。体に気をつけて練習に励んでね。はるか遠い所から祈っています。四年後金メダル間違いなし。私四年後お会いできるかな？　頑張って生きるね。麗楽ちゃんお疲れ様、ありがとう。このご時世、私達に勇気と元気、そして笑顔をもらった。温かいエールを送ります。

私の東京オリンピックから五十四年　　令和三年

昭和三十九年、私は東北の片田舎から就職列車に揺られて着いたところは渋谷にある小さな中小企業の会社でした(失礼)。

その年の秋、東京オリンピックが開催されました。日中は仕事で見ることができませんでしたが、仕事が終わると急いで寮に帰り、テレビに見入っていました。当時、東洋の魔女と言われたあの豪快な葛西選手が率いる女子バレーを応援していました。

そして、マラソンのあったその朝、社長が言いました。「きょうは近くをアベベが走るので、仕事を中断して見て来なさい」と。私たちは喜んで甲州街道に架かる歩道橋から、裸足で走ってくるカモシカのように細いアベベの姿を目の当たりにしたのです。今でもあの光景は忘れられません。社長の寛大な心遣いがなかったら、私は本物のアベベを知らなかったでしょう。感謝感謝。社長の会社も今では大企業に成長したと、同僚からの年賀で知りました。

あれから五十四年になります。再びオリンピックを見られるなんて。場所が違っても、見る内容は同じだと思います。そして、最終日、私は女子バレーが優勝した瞬間を銭湯の帰り道で知りました。民家のテレビから聞こえてくるあの歓声が路地まで響き渡り、「ああ勝ったのだ」と知りました。

今、七十三歳になる私には、この二つが東京オリンピックの記憶として残っています。アベベも葛西選手も亡くなりましたが、再びオリンピックに出合えるなんて夢のようです。今回はどんな思い出を残せるだろうか。旅立つ日、私は両人にどんな優勝旗を土産に持っていけるだろうか。今から楽しみです。

これが台風の空の色か…　　令和元年

先月の台風十九号から早や一ケ月以上も過ぎました。今回の台風では日本列島至るところに甚大な被害をもたらした大雨による大洪水だ。被災された人たちはいまだ大変な思いをしている。気象庁は六十一年前に起きた狩野川台風以上に史上最大の規模になると発表した。まさに的中した。

私が六十一年前は十三歳で中学一年生でした。(昭和三十三年九月二十七日、翌年三十四年九月二十六日は伊勢湾台風でした)犠牲者が五千人以上も出たとあとで知った。周りはどんな状態だったのか分かりませんでしたが、こんなことを覚えています。

生まれ育った東北の山奥にある「ポツンと一軒家」のような家にはテレビもラジオもありません。まして電話、携帯、スマホなどは夢のまた夢。台風に関する情報は何ひとつ入ってきません。今は情報を伝える便利な利器が発明され、いつも事前に情報が分かります。急に強い風が吹いてきた。「これは台風だ、逃げろ」と父が叫んだ。兄弟三人と両親で裏の豆畑へ逃げ込んだ。家は吹けば飛ぶようなぼろ家だったので、家の中は危険だったのだろう。今は外は危険だという。風の強さはどんなだったかよく覚えていないが、「逃げろ」と言ったので、相当強かったと思う。

畑へ逃げた私は畝尻(畑の一番下)で豆の葉っぱをむしり、敷物にしようとしていた。何をしてるんだ、早く上がれ」と父が畝頭(畑の一番上)で怒鳴ったようだ。私のいたところは畑の水がいっせいに流れ落ち、プール状態になるようなところだった。だから、なおさら父は強く言ったのだろう。雨は降ってこなかった。畑の畝をはい上がり、畝頭に上がった。何かあったらいつでもここへ逃げろ」と言われていた。今はそこも危険だ。近くにはマブ(土手)がある。土砂崩れが心配だ。それまでは一度もなかった。畝頭には家族が待機していた。(この畑、今はダムの底に沈んでしまった。厳しかった父も二十年前に天国に沈んだ)

畝と畝の間にあおむけになり、空を見上げていた。雲の流れが異様に早かった。不気味な色をしていた。「これが台風の空か」と今でも朝、窓を開けると東の空がこの色に染まる光景を見る日がある。今年も一度、保内山の空がその色に染まったのを見た。どのくらいの時間がたったのか定かでない。風神様が帰ったから家に入ろう」と父が言った。家は飛んでなかった。子どもの頃から風神様、雷神様、御明神様、御水神様(竜神様)、釜神様(火の神様)と「様」を付けて呼んでいるのに、どうしてこんな悪さをするのでしょうね。屋敷周りにはこれらを祀る「ほこら」がある。子どもの頃、毎朝お参りさせられた。人間の力には限りがあります。どうか風神様、竜神様、これ以上暴れないでください。これ以上事を大きくしないでください。あなた方の力にはとうていかないません。犠牲になられた方々へのご冥福を心よりお悔やみ申し上げます。被災された方々の一日も早い復旧復興を願います。

今でも獅子舞あるの？

令和四年

東北のある山間地に生まれそこで十八年間暮しました。その地方では一年中何かと祭りや伝統行事が盛んに行われた集落でした。一月は鳥追い・獅子舞、二月は焼嗅し、四月花祭り、八月盆踊り・花火大会と十二月果報だんごとそれはそれは大人も子ども一緒になって楽しんでいました。その中で私が一番印象に残っている行事に獅子舞がありました。今回はそれを紹介したいと思います。

一月十五日、村の青年団が主催となり、集落四十四軒を一軒一軒くまなく舞って廻ります。私の所にはいつも昼頃来ます。その年は昼になっても来ないので「今どこの家だか見て来い」と父に言われ、坂道を下りて見に行った。もうじき家の番だと言うのに、獅子はある農舎の中で酔っぱらって寝ていた。

「父ちゃん、御獅子様(おすすさま)竹藏ろんの既(農舎)で寝ていたよ」

「困ったもんだ、誰が獅子頭だった」

「竹藏のろんの兄にゃのようだった」

「あれは駄目だ」

何が駄目なのか今になって分かった。いつも“もうてない”兄にゃと呼ばれていた。何でも獅子舞の上手・下手は獅子頭の舵取りで舞が決まると言う。下手な人は本当に寅踊りになると言う。

酔いがさめたのか午後から天狗様を先頭に太鼓持ちも一緒に上がって来た。天狗様が土間の大黒柱の側に仁王立ちになり御幣を振りかざし獅子を迎え入れる。ドンドンドンと太鼓を叩き勢いよく獅子が

舞い込む。私はその先の光景が怖く毎年奥の部屋に隠れ障子の穴からそっと見ていた。獅子が来るから出て来てお祓いをしてもらいな」と母親の声がする。恐る恐る出て来て頭を『ペクリ」とかんでもらう。風邪を引かぬよう、病気にならぬよう」などと何か呪文を唱えていた。無病息災・五穀豊穣の意味であると言う。その時のあの獅子の異様な口臭が今でも身に染ている。酒の臭いと汗の臭いだ。ここまで来るには相当な御神酒を頂いたのでしょう。何せ地元の盃はコップか湯呑み茶わんである。どれ程の量になると思います。普段は晩酌もしないでつつましく暮らしているのに、どうしてこういう時は大盤振る舞いをするのでしょう。それが本当の「おもてなし」と言うのでしょう。

最後の家に着くのはいつも八時頃になると言う。正月実家に電話した。「今でも獅子舞あるの？」と、「あるよ。しかし少子化で参加者が少なくてね」と、言っていた。

昔の獅子頭はみな当に八十歳以上である。獅子頭だった兄も太鼓持ちだった弟も亡くなった。いつまでもこういう伝統文化が続いてほしいと願う（幻になってはほしくないと遠い空の下で願う老女である）。

私の山歩き、山ある記　六

菅原昭子

忘れられない山行

一kg超の重たいトランシーバーを携えての登山で、そのことだけでも弱冠二十三歳のヒョッコにとってはいっぱしの登山家みたく特別な感じがした。ラッセルは膝上十五㎝程の雪、十分～十五分の交代でやっとだった。空模様も何とか持ちこたえたが十六時前テント設営時には風が出てきて寒くなった。一番先にテントに入れてもらった。中に入ると風はシャットアウト本当に暖かく感じた。テントのありがたさを身をもって知った。翌朝は静かな夜明け、山際の薄い橙と瑠璃色の空が美しく神秘的だった。目標の山頂が見え「今日は行ける」と内なる闘志が湧いてきた。ワカンの紐がガチガチに凍ってしまい私の腕の力では思うようにならず苦労した。九合目から先は風で雪が飛ばされたクラストの雪面をきしませながら一歩一歩山頂を目指した。エビの尻尾は今まで見たこともない立派な翼に発達し、まるでサモトラケのニケ！　風の彫刻、自然の造形美を女神様から頂き感動。山頂で八時の定時交信。「…感度良好…」私にとって記念すべき正月の粟、初の冬泊山行だった。一場面づつスライドショーのように今でも情景がはっきりと浮かぶ。昭和五十四年一月二、三日下田口より男性三名女性一名計四名で。行程は二日午の背の先、有沢ポール二本目付近でテント泊。三日粟の山頂に立って加茂側へ下山。加茂側からの登山者二名と砥沢ヒュッテ上部でスライド。二日間トランシーバーを通して見守ってくれ、下山の出迎えなど陰で支えてくれた山仲間にも感謝。山行ノートに「もっと雪が深くても、もっとザックが重くても通用するようになりたい。いつかみんなのために」と当時のヒョッコの気持ちが書いてあった。「山で鍛え共に学ぶ」これは山仲間との人間関係や心意気を表す私にとって大切なkey word。このような環境で厳しく、暖かく育ててもらったとしみじみ思う。嬉しい時も悲しい時も、苦しい時も山の仲間と共に有った。

佐渡金北山

新潟港六時発の佐渡汽船で両津港へ、さらにドンデンライナーに乗り継いで終点ドンデン山荘下車。いよいよ大佐渡縦走の始まり。今日のコースはドンデン山荘から縦走路に入り金北山を目指す約十三キロの山歩き。縦走路は花であふれていた。角田山や弥彦山ではとうに終わっている雪割草やカタクリがまだ頑張って咲いている。旬のシラネアオイが行けども行けども次から次へと迎えてくれた。フデリンドウも今年は見られずじまいかと諦めかけていたが佐渡で待っていてくれた。嬉しかった。この株は力強く野性のままに咲いていた。それからヒメイチゲ。これも好きな花。粟ヶ岳の山頂付近にも咲いていて、控えめな優しい小さなお花。この三種に会えただけでも満足だ。他にもルイヨウボタン、ザゼンソウ、ミズバショウ、キジムシロ、ヒトリシズカ、ウスバサイシン、

ミヤマカタバミ、イワカガミ、キクザキイチゲ、エンレイソウ、ニシキゴロモ、アマナ、サンカヨウ、チゴユリ、エゾエンゴサク、ショウジョウバカマ、スミレの仲間、タニウツギ、アラゲヒョウタンボク、ミネザクラ、タムシバ、オオバクロモジ、レンゲツツジ、オオカメノキのお出迎えに丁寧にごあいさつをして、歩みがなかなか進まない。両津港行き最終バス金北山ライナーは午後四時半、ならば下山は四時白雲台着をめどにペース配分。天気も良く、同行メンバーは満足した様子。山は小さなアップ・ダウンの繰り返しで両津湾や真野湾を眺め山の稜線を追いながら楽しく歩けた。遠く近くのさまざまな緑に包まれて、小鳥のさえずりにも耳を傾け、緑のそよ風にのんびり。金北山の最後の急な登りで残雪があったが、ロープが設置してあり問題なし。ただ雪に不慣れな他のパーティのお姉様方はやや苦戦。山岳ガイドさんの励ましの声が聞こえた。妙見山にも脚を延ばし余裕を持って終点着。妙見山の一部は防衛省管理道路となっている。椎峠温泉の露天風呂で登山の汗を流す。九州からツアーでお越しのお姉様曰く、『二泊三日で参加代金十九万円余り。ちょっとお高く思ったけれど参加してよかったわ』と。

最終船で新潟港着午後十時。帰宅は十一時。一日フル活用、天候にも恵まれ我々にとっても楽しい『花の山旅』だった。Nさん、Kさんありがとうね。

令和四年五月十一日

新潟焼山　（二千四百メートル）

新潟県上越地域に聳える火打山、妙高山、新潟焼山を頚城三山と呼ぶそうだ。そのうち新潟焼山は二〇一六年三月から二〇一八年十一月まで入山規制の山だったが、噴火警戒レベル一『活火山であることに留意』に変更となり立ち入り規制が解除になっていた。昨年夏、花の金山から眺めた新潟焼山と火打山、この時から新潟焼山に行きたい気持ちが再燃した。今年七月に入って計画が具体化した。予てから声掛けしていたメンバーと一回目は雨天予報に振られて叶わずじまい。再度仕切り直しの二回目に漸く出かけることができた。連日熱中症アラートが続出しているので暑さ対策は万全に、凍らせたペットボトルやスポーツドリンクなど水分四ℓ弱ほど充分用意した。早朝二時に三条を出発して涼しい四時半には登山開始できたのも功を奏した。

樹林帯では直射日光をしのげた。大小四つの雪渓はヒンヤリと涼しくて気持ちよかったが一つ一つの谷への急斜面を下り、雪渓を渡り対岸の淵に取り付き急斜面を登り返す。これを慎重に丁寧に繰り返して小雪渓、大谷、地獄谷、水無谷を進む。道中季節の花カラマツソウ、サンカヨウ、オオサクラソウ、キヌガサソウがたくさん咲いていて綺麗だった。森林限界を過ぎ標高二三〇〇m付近からは足場の定まらないザクザクで歩き辛い。一歩一歩慎重にバランス良く足を進める。山頂近くロープが下げてある岩場の景色や岩場の通過はとっても楽しい。写真ではなく、本物の山頂標識を見たいと思い続けていたので山頂標識にタッチした時は漸く念願かなったと感慨深かった。あとから到着

した若い女性がその標識に腰かけて、写真を撮ってもらっていた。標識にお尻を乗せるなんて如何なものかと思うのは私だけ？　頭の固いバーさんになったせい？　端で黙って見ていたが見た目もあまり良いとは思えなかった。山頂休憩中は青空も見えるが、すぐまたガスがもくもくと湧き上がって肌寒いくらい。硫黄の臭いも感じた。晴れていれば北アルプスが見渡せるはずだが今日は残念。今回は　焼山の山頂に到達」が第一目標なので十分満足。更に新潟焼山と火打山間への縦走も解禁となったばかり、次に繋げるための偵察もしっかりと抜け目なく。赤ペンキの道標は下り始めがかなり急な感じだった。ここ山頂までの道のりは地元の焼山愛好家や、自治体の焼山関係の方々によって藪刈り、下草刈り、道迷い防止のピンクテープ、岩場のロープ張り替えなど登山道整備がしっかりされてありとてもありがたかった。日中気温三五度の予報の中、熱中症に気を付けながら長いルートを無事行って来られた事が何よりだった。メンバーのみんなに感謝。新潟焼山初登頂、嬉しかった。

令和四年七月三十一日
登り五時間半
下り四時間
全行程約二十一㎞

先ずは少々ウォーミングアップをお願いします。

例一　オリンピックで選手は

A　メダル獲得はおろか予選通過もかなわなかった

B　予選通過はおろかメダル獲得もかなわなかった

例二

A　厳冬期の富士山はおろか夏の富士山にも登ったことはない

B　夏の富士山はおろか厳冬期の富士山にも登ったことはない

さて、例一と例二それぞれAとBどちらが正しい文章（日本語使い）でしょう？

正解は……例一・例二ともにAです。

山関係の月例通信に会員が順番に投稿するコーナーがあります。花子さんの文章が載っていました。その中で「…低山はおろか谷川岳にも登ったことがない…」と書かれていました。一読で　おやっ？　変だ。低山と谷川岳が反対だ」と間違いに気付きました。花子さんに失礼のないように丁寧にやんわりとそのことを伝えました。私としては　あっそうね。ほんとだ、反対だわ（笑）」で終わると思っていました。ところが花子さんは　間違っていません。わざとそうしたのです」ときつい声色で言い返されました。私の想像からかけ離れた反応に驚き、戸惑いを感じました。文章中どういう効果を狙ってわざとそうしたのか知りたいと思いました。花子さんの話を注意深く聞きました。　夜遅くに焼

酎をちびりちびりやりながらパソコンに向かった…」とか 公文書とは違うし、細かいことを言うものじゃない…」とか、私が知りたい『なぜわざとそうしたのか』については語らずじまい。ただの言い訳に聞こえただけでした。要するに誤りには気が付いたけれどそれを認めたくない、ごまかしてしまいたいのでしょうか？ 自分のプライドのために。それまでのことはともかく、私にとってこのやり取りは、花子さんの性格をにじませ、決定づけるに十分な出来事になってしまいました。

Ｐｒｉｄｅ(プライド)って何でしょう？ 言葉の意味としては【自己または自己の価値・功績・優秀さに対する正当な自信[自尊心・誇り]または過度の自信[うぬぼれ]】と英和辞典に。では登山の場面を考えてみると…花子さんは何かに秀でていてそれなりの自信を持っているのです。周囲も優秀さを認めていれば問題ないですが、誰も注目していない場合はどうなるのでしょう。花子さんの秀でるものが具体的に何なのか私には分かりません。でもそれが何であるにせよ花子さんに伝えたいです。『Ｐｒｉｄｅが傷ついたとか傷つけられたとか言う前にＰｒｉｄｅに恥じない行動をとることが大事なのではないですか』と。山では実践、つまり『山でいかに行動するか』が最も重要なのです。山の中まで人間社会の社会的地位・経済力・職歴・学歴で作られた序列を持ち込んだとしてもそれだけではなんの役にも立ちますまい。

十年以上も前に、新聞のコラム欄で目にしたこと『山が面白くなるには経験と哲学が必要。自然の中で緊張関係を保ちながら自分の判断と責任で行動し生きてきた』と。そう言い切ることができる、これこそ『Ｐｒｉｄｅ』だと私は思いました。私にはとても到達できない領域ですが…憧れではありました。これくらいＰｒｉｄｅとは高級で尊いものと私はとらえていました。一方花子さんのガヤガヤレベルとに立ちはだかる大きなギャップ、花子さんにはずーっとそのギャップはわからないだろうと言う人や、一緒に行動したくないと言う人までも・・・。このままでいいはずがないと思います。花子さん、意地を張らず素直に他者の声に耳を傾けてみてください。自分のための技量として取り込んだ方がスマートだと私は思います。山行に関してプラスになる考え方や情報が先方から来てくれるのです。上手にキャッチしましょうよ。

文集「伊久礼」に長年にわたり寄稿してくださった、故・田辺一也氏が書いたエッセーを紹介します。

祖母と孫

田　辺　一　也

寺年始で、祖母の五十年、母の十三年の年忌札を渡された。俺と妻の元気なうちに出来る最後の祖母と母の年忌だと思い、八月一日の新盆法要に参列した。読経を聴きながら、五十三歳で亭主に先立たれ、九十三歳で逝った母のことを思い出していた。死化粧をほどこし、北向きに寝かされた母の枕元の小さな机に灯明が点り、そこに小さく畳まれたチリ紙が置いてある。開くとぼろぼろになったチリ紙に包まれた壱万円札が一枚出てきた。誰が置いたのかと聞くと、俺の次男とのこと。さらに聞きただすと、次男は専門学校を卒業後、東京の会社に就職したが何年も経たないうちに会社は連続倒産に遇い、失職した次男はやむなく生家に帰ってきた。

母は八十歳を越してまだ健在のときで、失業して実家に戻った孫に国民年金をおろし、口外無用を約して与えたらしいのだ。ばあちゃんの僅かな年金から貰ったお金だと思うと、有難かった、と次男はいう。その思いは日が経つにつれて増していった。この壱万円はどうしても使う気になれず、財布の奥に入れているうちに、お守りだと思うようになった。再就職してからも十余年余り、この壱万円札は、ばあちゃんと一緒に居るような気がして安堵できたのだ、と言う。

ばあちゃんが亡くなったので、財布の奥から出して返さねばと思って、感謝しながら枕元に置いたのだという。祖母と孫とのあいだに親たちの知らない絆があったことを教えてくれた年忌法要であった。

佐渡ヶ島の川柳　～夏の日～

旭小学校　六年生

夏の海　船で見かけた　あの魚　　青木　紗夏

夏の海　海の先には　佐渡ヶ島　　泉田　志雄

たらい舟　すき通る海　きれいだな　　大桃　一穂

朝焼けに　みんなでながむ　佐渡の海　　大山　望花

夏の果て　どこまで続く　水平線　　倉茂　恭子

佐渡ヶ島　夏の海は　きれいだな　　小林　玲音

海の向こう　思い出たくさん　佐渡ヶ島　　佐藤　瑛太

夏空を　羽ばたくトキに　ときめいた　　髙橋　青生

たらい舟　底まで見える　佐渡の海　　塚田　大雅

フェリー乗り　船から見ている　カモメたち　　鳥羽　駿

わくわくが　泉のように　わいてくる　　鍋嶋　優奈

たらい舟　フグの群れ見て　進む夏　　西村　斗亜

波の音　こわくて寝れぬ　佐渡の夜　　矢代　翠

海の上　カモメと向かう　佐渡ヶ島　　山沢　佳暖

作詞　理容ふれあい音頭

長橋正宣

一、向う鏡に　あなたが映る
あたまスッキリ　心はキリリ
今日も理髪で　いい気持　ソレ

※
理容おんどで　仲よくまるく
スッキリシャッキリシャシャントネ

二、髪の手入れで　つかれもとれる
愛のバリカン　ハサミの歌に
あたるカミソリ　肌ざわり　ソレ

※
くりかえし

三、みがくこの技術（うで）　お客を招く
かようそよかぜ　みとれるほどに
光るセンスが　夢を呼ぶ　ソレ

※
くりかえし

四、花がほほえむ　笑顔がはずむ
理容ひとすじ　心をこめて
家族みんなが　後を押す　ソレ

※
くりかえし

作詞　おとうさん

長橋正宣

一、おとうさん　おとうさん
いつもむっつり　してばかり
甘いことばは　ないけれど
なぜかまなざし　あたたかく
だまって見ていて　くれました

二、おとうさん　おとうさん
ずいぶんお世話に　なりました
きっとなります　幸せに
嫁ぐわたしの　あいさつに
なみだをこらえて　いましたね

三、おとうさん　おとうさん
長生きしてね　いつまでも
苦労苦にせず　添い遂げて
はやく見せたい　孫の顔
待って下さい　おとうさん

俳句「つれづれ」

鶴巻　ちしろ

春日呆赤黄男の虎に吠えられた

花冷えの空がぽかんと神経科

バターナイフ切ってくもらす夏の空

花の山深いところが病んでいる

夏ちゃんがまるごと風になって夏

蕗煮つついま生涯のどのあたり

えごの花人をあやめたことのあり

脳天を青葉しぐれに打たれけり

はつなつのいきいき声を出す酵母

老女よりケイタイがありパリー祭

蕗食うべからだの透いてゆくような

これやこのぼうぶら欝のかたちして

ひとるたま少年の日の永きかな

少年のねじり鉢巻き山笑う

いきいきと声出す酵母夏来たる

ひとみの中の青田千枚晴れわたる

大の字にあらざる午後の暑をねむる

ニシワキはもぎたての茄子まるごと食う

花虻を見にゆくあわれ兄いもと

ひとり覚め人はさびしいカブトムシ

伊久礼俳壇

（五十音順）

子等の声消えて終りし草花火　市川明美

みどり児の微笑み返す小春かな

大寒やリハビリの声力込め

初セリのマグロ響動（どよめ）く高値かな　菊田チイ

小さき手の一人ままごと梅の花

母の日や風来坊のプレゼント

散る花を惜しむ歩幅となりにけり　久和原賢

更衣今日より風を着て歩く

曝書してわが青春に出遍ひけり

異常なし医者の囁き春の風　小出のぼる

願いの糸寧日続き春惜しむ

茄子漬の旨味満載家族の和

卓球の一戦あとの団扇風　関宏士

草笛や嵌る道草風ゑくぼ

人を避けウエルス避けて八十の路

秋風や幸せそうな愚痴を聞き　関川芳弘

新米を研ぐ指先の踊り出し

文化祭平和の文字濃く太く

今年米先ずは親父の仏前に　田辺克文

朝日入る農舎に遊ぶ冬雀

ひとひらの桜に遊ぶ鯉の口

満月や良寛偲ぶ国上山　鶴巻雄風

コスモスや今がしあはせ揺れてゐる

朝漬けの茄子の紺色すこやかに

父の日に靴篦（くつべら）贈られ又千歩　村越允弘

補聴器の妻に聞こえぬ青葉風

夕焼に明日の仕事残しをり

六地蔵人それぞれの春はくる　山崎洋子

山あいの小さな局に鯉のぼり

新涼や朝茶の香りも格別に

俳句　四季

久和原　賢

一月(睦月)

八十を五つ超えしと初電話
検診の予約をめくる初暦
取り敢へず身の幅のみの除雪かな
あしあとは鳥犬猿と雪女
凍雲や十六羅漢うんの口
雪吊の手持無沙汰の日なりけり
恋猫に門限はなし朝の月

二月(如月)

降り止みて月の攫ひゆく春の雪
逢うてすぐ次の約束春の虹
越後にもこんな小春の日ありぬ
また一人友の減りゆく春隣
冬凪や屋根に石置く出雲崎
補聴器を驚かしたる猫の恋
畳の目数ふるごとく日脚伸ぶ

三月(弥生)

植木屋の切って眺めて日脚伸ぶ
立春といふ一枚の空仰ぐ
どこまでも即かず離れず春の月
書き出しの一行春の近きこと
更新と予約あれこれ日脚伸ぶ
聞き役のつもりでゐしがマスクとる
西暦になじめぬままに老の春

四月(卯月)

うぐいすの美声はいつも昼下がり
春匂ふ色に光りに音に風
聴診器背中をあるく余寒かな
雪空に直立不動の兵の墓
置炬燵日本に裏と表あり
菖蒲湯に男の余生溢れ出ず
白鳥に越後平野を明け渡す

五月(皐月)

地続きの家を烟らせ畦を焼く

百枚が一枚となる青田かな

捨て苗に大地を掴む力かな

代掻きを了えし水面に地の呼吸

秘め事は喋りたきもの水温む

躾糸抜かれたやうな花疲れ

芋植うる足の物差したしかなり

六月(水無月)

生きるとは繰り返すこと草を刈る

膝崩し箸割る音や走り蕎麦

晩学に眼鏡がふたつ啄木忌

葉桜やどこにも停まる縄電車

どの枝の先も青空剪定す

筍を茹でをり雨に籠りをり

乱れなき植田に力見え始め

父の日が照れくさそうにやってくる

七月(文月)

ありがとうが妻の口ぐせ柿若葉

肩の荷をおろす軽さや更衣

紫陽花に告げたき悩みひとつあり

早苗田の青に溶け込む越後線

人生に推敲はなし遅桜

風に敵見方ありて野火走る

風鈴のときどき独り言をいう

八月(葉月)

筍は一日一尺我一句

良寛の無に縋りたきこの暑さ

更衣過去と未来の狭間にて

青田風鷺は首より歩き出す

羅にかくせる程の愁ひあり

太陽が箱いっぱいのトマトかな

冷戦の続く世界や梅雨深し

九月(長月)

二人して先逝く話帰り花
つつがなく老いし二人の大師講
貼り終へて日暮をのばす障子かな
裸木となりて素直になりにけり
日溜りを拾ひ歩きの冬帽子
短日や鎌に荒研ぎ仕上げ研ぎ
峰ふたつ即かず離れず秋立てり

十月(神無月)

もう少し生きると定め冬構
雷鳥の首より走る雪催
大根を干して弥彦の裾広ぐ
ウエルスの針を見てゐる冬ぬくし
返り花訃報はいつも出し抜けに
干し大根持ち去る風の又三郎
身に入(し)もや一合飯を炊く暮し

十一月(霜月)

光る山猫背の山も眠りけり
大根引く穴にも個性ありにけり
高き木がそのまま高し冬に入る
マスクして大きさ違う左右の目
山眠るやうに眠りて友逝きし
初雪は少しはにかみながら降る
村々をつなぐ七色冬の虹

十二月(師走)

初雪を踏むりょう童心の八十五
晩年の省略あまた年用意
新雪の眩しき野辺の送りかな
降る雪のやがて覚悟の雪となる
全身を写す鏡の寒さかな
残生を神にゆだねて去年今年
とびきりの越後日和に布団干す

あとがき

委員長　力　石　岩　男

今年も新型コロナウイルス感染症に始まり、今でも国内感染者数の増減のニュースに目が離せない状況です。ワクチン接種も進み旅行も出来るようになりましたが、気を付けて生活をしなければならない中で、たくさんの寄稿をして頂き、皆様には心から感謝申し上げます。

「聞き書きレポ」は皆様の体験は地域の貴重な歴史であり、後世に残していきたいとの思いから始め今年で四年目になります。同世代の方は当時の様子を思い出し、また若い世代の方には今とは違う様子を知っていただくきっかけにして頂けたらと思います。

今後も皆様から楽しんで頂けるように努力して参りますので、皆様のご協力をお願い申し上げます。

文集「伊久礼」

発刊委員

委員長　力石　岩男
委　員　大山　隆夫
委　員　佐藤　太郎
委　員　菅原　昭子
委　員　熊倉　貞子

令和四年十二月一日

伊久礼　第六十八号

発行所　井栗公民館